

巻頭のことば

珠玉の原稿をお送りくださった皆様のおかげをもちまして、「キリスト教と諸学」三十号を発行するに至りました。心より感謝いたします。この書冊は聖学院大学開学一九八八年（昭和六十二年）の二年前から毎年一号を目指して発行してきました。従って記念すべき創立三十周年も間近となりました。

三十年の歳月をどのように考えたらよいのでしょうか。当時のアメリカはロナルド・ウイルソン・レーガンが第四十大統領、韓国は盧泰愚大統領誕生の時代でした。あれから三十年、ドナルド・ジョン・トランプが第四十五代大統領に選出され、韓国は朴槿恵第十八代大統領がマスコミを賑わせている昨今です。何かが変わってしまった。これが正直な感想ではないでしょうか。その評価は三十年後の歴史家に任せることとします。

この社会は、何がいつどのように変わったのでしょうか。あくまでも私見ですが、周知のように一九八九年のベリリンの壁の崩壊と共に東西冷戦の終結を見ました。一九九一年の十二月のソ連崩壊以後、米国で軍需用に研究・開発されたインターネットが民間に開放されたことで情報化は加速した事実があります。特に九十年代半ばからはインターネットが急速に全世界に広がり、瞬時に双方向での大量の情報交換が可能となりました。いわゆるIT革命です。ここから世界の様相は加速度的に変わっていったといえるでしょう。携帯電話の普及は世界中にまで行き渡っています。ある時ある画面で裸族の方が右手に槍を持ち、左手の携帯電話を耳に当てている姿を拝見しました。情報は個人から個人へと世界の隅々まで流れて行きます。

現代ではどの先進国でも大衆迎合型ポピュリズムが勢いづいているように見えます。かつて聖学院大学で講演を

してくださった佐藤優氏（作家、元外務省主任分析官、同志社大学大学院神学研究科修了）は、ある対談の中で、「今日、エリートやリーダーのあり方が以前と大きく変わってきているのは、経済のグローバル化、すなわち新自由主義の浸透と深く関係しています。格差が拡大し、階層が固定化していくなかで、エリートと国民との間の信頼関係が崩れ、民主主義がうまく機能していません。民主主義は、世界中で機能不全に陥っています。ところが、民主主義に代わる制度はみつからない。」と述べています。

これからの三十年後はどのような世界になっているのでしょうか。資本主義体制の行き詰まりを主張する人もいますが、これに代わる体制も見当たらないのではないのでしょうか。いずれにしても新自由主義の陰に「思考の一貫性の欠如」「知的凡庸さ」「攻撃性」「金銭の魅惑への屈服」「愛情関係の不安定」があるとするならば、それに歯止めをかけるのは必然ではないでしょうか。それができるのがキリスト教の価値観であるに違いありません。「キリスト教と諸学」の六十号では、「キリスト教と諸国」の関係が祝されたものでありたいと願うのです。

聖学院キリスト教センター所長

山口 博